



第101号
北海道教育大学
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村
(TEL 0126-45-2300)



IWAMIZAWA
UNIVERSITY

〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉

- も ○巻頭言……1 ○空知青陵会実践交流会……2
- く ○空知青陵会実践交流会全体講演会……3 ○退職支部長からのメッセージ……4
- じ ○新青陵会員の抱負……5 ○各学科の活動状況……6～7 ○事務局便り……8



会報「道青陵」への
執筆にあたり、青陵会
石狩支部の活動について
ご紹介いたします。

我々青陵会石狩支部は三一五名の
仲間とともに、事務局と四つの部を
中心に「磨き合い、心ふれ合い、響
き合う」という青陵会石狩支部の指
針の下、さまざまな取り組みを行っ
ております。

初めに、四つの部について紹介い
たします。

① 庶務部く懇親行事の企画・運営

- 4月 定期総会後の懇親会
- 7月 新入会員歓迎会・同期交流
会・若手教員激励会（組織部
と共催）
- 8月 夏季研修会後の懇親会
- 12月 退職校長激励会（事務局と
共催）
- 3月 校長採用・教頭昇任激励会
（事務局と共催）

② 研修部く会員の資質能力の向上に
関する研修活動

- 8月 夏季研修会・道青陵研究大
会との連携

③ 組織部く会員名簿の作成・配布

- 6月 「青陵石狩会員名簿」の完成
と配布
- 7月 新入会員歓迎会・同期交流
会・若手教員激励会（庶務部
と共催）

④ 広報部く広報「青陵石狩」・交流
誌「あすなる」の発行

- 7月 広報「青陵石狩」発行
 - 12月 情報誌「あすなる」発行
 - 2月 広報「青陵石狩」発行
- このように研修・交流・親睦を中
心に年間を通して活気ある活動を展
開しております。

また、支部の部会とは別に、会員
の資質能力の向上を目的とした「学
習会」があります。四月から十月ま
で、主に管理職試験に対応した論文
学習と面接指導を行います。国や
道の教育情勢や今日的教育課題等
についてのフォーラムもあり、参加者
にとって貴重な情報交流の場となっ
ています。

次に本支部の活動の目玉である、
夏季研修会について紹介します。こ
こ数年は若手・中堅教員によるワー
クシヨップ形式の研修会を開催する
など、その充実に努めてまいりました。

磨き合い、心ふれ合い、響き合い

北海道教育大学青陵会石狩支部 支部長 柳田 卓哉

しかしながら大学の改変を機に、大
学側と連携し教員のカテゴリーを超
えた講演会や研究会、音楽会や体育
実技研修会等を開催することはでき
ないかと考え、一昨年は道内大学サッ
カーNo.1の岩見沢校サッカー部監督、
越山賢一氏を講師にお迎えし、「コー
チングを通しての人材育成」を演題
に講演をしていただきました。また、
今年度については岩見沢校芸術文化
コース卒業で、現在はプロのソロア
コースティックギタリストとして幅
広い活躍をしている山木将平氏によ
る「音楽と縁(えん)」をテーマにした
講演と演奏会を開催したところです。
この様子は道青陵のブログ(<https://seiryuokai.tumblr.com>)にも載っ
ていますので、ご覧ください。

このように、直接学校経営や教育
活動とは関わりませんが、講演を聞
きながら講師の生き方を自分と重ね
合わせ、別な角度から物事を捉える
ことも大切なことだと思います。ま
た、どちらも岩見沢校とのつながり
に深い方でしたので、懇親会も大い
に盛り上がり、成功裏に夏季研修会
を終えることができました。

最後になりますが、道青陵会の益々
のご発展と、「磨き合い、心ふれ合
い、響き合い」の下、今後も魅力あ
る青陵会石狩支部であることを誓い、
本支部の紹介といたします。

空知青陵会教育実践交流会

「自ら磨き、進んで社会・学校づくりに
貢献できる人間力の育成」
「生きる力を育む教育活動につながる実践を通して」

一、はじめに



平成三十年一月二十日(土)午後二時より、岩見沢市「岩見沢平安閣」におきまして、空知青陵会実践交流会が開催されました。第二十八回目を

迎えた今回は、「自らを磨き、進んで社会・学校づくりに貢献できる人間力の育成」生きる力を育む教育活動に育む教育活動につながる実践交流を通して」を研究主題とし、分科会、講演会を中心に実践交流が行われました。

このテーマのもと、三つの分科会を設定し、より実践的なテーマで意見交流やワークショップ、研究協議が行われました。また、分科会終了後は、木村直也氏(滝川市教育委員会社会教育課)を講師に迎え、「全国学生駅伝に携わって」という演題で講演頂きました。また、実践交流会終了後には、今年度の空知青陵会「親睦と感謝の集い(新)」が開催され、本年度ご勇退される先輩方と共

に名残惜しみながらも和やかな時間を過ごしました。

二、分科会

【第一分科会】

「形式にとらわれない教育実践や抱える課題の自由な交流中心」

岩見沢市立栗沢小学校 三好孝史教諭から『主体的・対話的で深い学び』を実現させるための基礎の基礎』と題した話題提供がありました。



「なぜ自分の考えをしっかりと表現できないのか」の理由の一つに人前で話をするための練習回数が少ないことがあるため、「自分の考えをしっかりと表現できるための指導ステップ」の実践例を紹介してくれました。

その後の話し合いの中では、「思いを話せる子、話ができる子」を育てていくために何が必要なのか話題になりました。「適切な環境」「時間と機会の確保」「意見を受け入れやす

い環境づくり」などが出されました。

【第二分科会】



岩見沢市役所健康福祉課保護課 鈴木 歩氏を講師に迎え、現在のお仕事の内容である生活保護制度についてや、運動能力を上げるおすすめ

トレーニング等についてお話し頂きました。

講師の鈴木氏の人柄の良さそうなるく和やかな雰囲気のもと、参加者からの質問コーナーも含め、和気藹々と声が飛び交う分科会となりました。

【第三分科会】

①「沼田学園設立」～成果と課題～

沼田小学校校長 疋田 博和 平成三十年度に設立される「沼田学園」に向けての取り組みを提言。機動的な組織構築に向けた小中連携や所属職員意識改革を図るための研修の充実などについて、成果と今後の課題を明確にしながら提言がされた。

②「地域に開かれた学校と地域に育まれる子どもたち」

北長沼小学校教頭 長崎 卓也 昇任教頭として、赴任以来の学校

運営に対して現状と課題を明確にしながらの提言。



北長沼小の特色ある取り組み、田植え歌踊りや地域と連携したドッジボール大会・スキー交流会など、地域の学校としての在り方を報告した。

ただ、平成三十二年に統廃合の予定を控えていることも報告。地域や諸団体との関わりが益々重要になってくる中で学校運営に対しての抱負で締めくくった。

第一分科会 参加者の声

南幌小学校 石田 建司

教育実践交流会の第一分科会に参加させて頂きました。岩見沢栗沢小の三好先生からの話題提供や他に参加された数名の先生からもレポートでの実践を頂きました。話題提供から幅広い話や交流が行えたことは、非常に有意義でした。

特に思ったことは、話ができる学級づくりのために、適切な座席や時間や機会の確保や受容感のある雰囲気づくりが、深い学びにたどりつく実感した良い一日でした。

全体講演会

「全国学生駅伝に携わって」

滝川市教育委員会 木村直也氏
 岩見沢市役所 鈴木達也氏

平成二十八年十一月六日、北海道教育大学駅伝部は、第四十八回全日本学生駅伝に北海道代表チームとして出場し、愛知県名古屋からゴールの伊勢神宮までの八区間約108kmを駆け抜けました。学生三大駅伝の一つであるこの大会に向けて厳しい予選会を勝ち抜き、スタート地点に立つまでには、当然のことながら様々な苦勞がありました。その活動を支援した中心的存在が、駅伝部のOBである本会の講演者 木村直也氏(28歳)です。また、当時四年生でチームのアンカーを務め、全日本での体験を語っていただいたのが、鈴木達也氏(23歳)です。

【木村氏より】

私は、岩見沢校がスポーツ課程の設置四年目にあたる平成二十一年に入学しました。私自身も陸上に関わり、卒業後の現在も滝川市役所に勤務しながら、学生と共に練習を続け、北海道マラソンにも毎年出場をしています。入学



当時、岩教大はバスケットボール部やサッカー部が強く、

全国レベルの活躍を見せていました。人生の中で一番時間を使える時に、やりたいことを全力で挑戦したい。そんな思いを胸に私は陸上部に所属。大きな結果を残すことはできませんでしたが、他の学生のスポーツに対する高い意識は、自分にとって大きな刺激でした。

現在は滝川市役所のスポーツ振興係として、マラソン大会の企画・運営やスポーツ施設の管理、東京五輪の練習施設誘致などにも携わっています。

岩教大駅伝部の活動には、大きなハンデが一つあります。全道の五分校から選手を集めているため、合同で練習ができるのは年に三回ほど。全員が常に顔を合わせることはないので、気持ちのまとまりはあつても技術的な面をカバーするのが大変です。駅伝は総合力の戦いですから。ただ、スマホのメールリストを活用し情報を常に共有しながら、お互いに高め合うことで、ハンデを克服してきました。

そんな岩教大駅伝部ですが、近年チームの選手層が厚くなっています。それは他の大学も同じなのですが、十三連覇していた王者 札幌学院大

に立ち向かうべく、私も時々練習に帯同しながらチームをサポートしてきました。そしてついに、十三年ぶり三度目の出場権を勝ち取ることに至ったのです。

私はチームに関わったことで、私自身が成長できたと思っています。今回の全国大会に向けては、特に遠征費の壁がありました。その穴を埋めるために、「岩教大駅伝部を応援する会」を立ち上げました。OBだけではなく多くの関係者を増やしたいという思いがあり、この度は空知青陵会の方々からも多くの協賛金を頂いたこと、大変感謝しております。会の立ち上げに伴い多くの方々から支援を頂いたことを重く受け止め、現在は情報発信としてホームページの開設をし、近況報告や大会結果の掲載など、会の継続を意識しながら活動を続けています。

今までは自分のためだけという意識が高かった私ですが、いつの間にかチームをサポートしたいという気持ちを持つようになりました。誰かのためにお金や時間をかけることはとても大変なことです。行動することの大切さが、今は自分の誇りです。

【鈴木氏より】

全国大会の出場を果たせたことは、何よりの自信になりました。そして、母校の名を全国に知らしめることは大きな誇りでした。全国の壁は非常

に厚く、思うような結果は出せませんでした。ゴールにたどり着いたときの風景は表現できないほど素晴らしいものでした。目標に向かって四年間努力してきたことは、社会人になった今も生かされています。木村さんは常にチームのことを思い、私たちをサポートしてくれました。私も木村さんのように行動力を持つて、チームの力となれるように努力を続けます



【参加者の声】

「講演を聴いて」

岩見沢市立南小学校

日野 光咲

駅伝の擲にはドラマがある。繫けなかつた擲、繰り上げスタート…。それでもランナーたちの絆は繫がっている。講演を行った木村直也さんは、「駅伝部を応援する会」で、走る教大生たちのサポートをしている。その援助のもと学生時代、全日本大学駅伝に出場された鈴木達也さんは、今の学生たちにもよい経験をさせてあげたいと意気込む。なんて立派な擲だろう。後輩たちのために私にできることは何かを考えさせられる講演であった。

退職支部長からのメッセージ



出会いと
つながりを大切に
高校・特別支援・
大学支部長
長谷川 和之

私が卒業したのは昭和五十五年三月でした。入学以前からくすぶっていた「札岩統合問題（札幌分校と岩見沢分校を統合させる、させない）」が決着し、単独整備の決定を受けて古い校舎が新しい校舎へと建て替えられ始めた初期のころです。二年、四年のほとんどの期間が校舎建設の時期と重なり、「いよいよ四月から新しい校舎の使用が始まる」という喜びの声を耳にしながらいよいよ直前の三月に卒業を迎えることになり、若干複雑な思いをしたことを今でも覚えています。そして、その後も岩見沢の同じ地で整備が順調に進められ、今のような立派な校舎と施設設備になったことは我が事のようにうれしく思います。

私の教職人生はというと、小学校での期限付教諭の時期を経た後、特別支援学校（当時は特殊教育諸学校）で正式にスタートを切りました。特別支援学校は学校ごとに対象とする障がい種が基本的には決まっています。

従って、「病弱の学校」にいけば教科指導が主になりますし、「知的障がいの学校」に行けば生活単元学習や作業学習といった領域、教科を併せた指導が、「肢体不自由の学校」に行けば車いすや歩行器、補装具などの福祉機器に関する知識や活用の仕方について理解を深め、その上での学習指導や自立活動の指導を行わなければなりません。私はそのいずれも経験することができ、異動当初は分からないことだらけで苦勞することが多くありましたが、その分、特別支援教育に関する経験の幅を広げることができ大きな財産をいただけたと思っています。そして、不器用な私がそのような中で教職を続けてこられたのは良き上司や同僚、保護者との出会いやつながりがあつたからだと思つづくと思います。

青陵会についても行く先々で良き先輩との出会いがあり、特に管理職になってからはそのつながりが仕事の面においても力強く私を支えてくれました。「高校・特別支援・大学」支部は会員が全道一円に散らばっているため、メールや印刷物を介してのやりとりが主で、直接会うのは年一回の総会に限られています。そ

れでもつながりを継続できるのは、「同窓」というものに何かしら安心や信頼を感じるところがあるからではないかと思えます。

退職を迎える今、支部長としてやり残したことはいろいろありますが、「後輩に渡して終わり」とは思いません。長いこれからの人生に「青陵会」をきちんと位置づけつつ、つながりを持ち続けたいと思います。



同窓の絆よ、永遠に…
札幌支部長
山口 徹朗

地理学研究室で学んだ四年間を終え、大学を卒業したのが昭和五十六年の三月でした。札幌市の新卒者大量採用の波に乗り、登録にはなつたものの、勤務校が決まり、教職生活が始まったのは、その年の九月でした。あれから三十六年余り、振り返ると長かつたような気もしますし、あつという間だつたような気も…何だか複雑です。

札幌支部は、結成から四十四年目を迎え、今年度は現職会員数が一六〇〇名を超えています。他の支部に比べると、学校数も多いことから会員数は大変大きな数字になっていますが、同窓の絆やつながりについて自分事として捉え、青陵会への参画意識をもつ会員が、それほど多いとは言えないということは、昨今の会

費納入率や研修会、懇親会への出席者数の減少からも感じています。

札幌支部では、結成以来、「仲間づくりは参加から ひとつ窓辺の磨き合い かたい絆で助け合う」という言葉をキャッチフレーズにしています。特に、この中の『磨き合い』にかかわつては、実り多い研修活動を積み重ねることによって、お互いに教員としての資質向上を目指していくという「学ぶ青陵」としての本筋とも言える部分です。

今後、後輩の大多数が教員以外の道に進むことがはつきりしている現状で、研修という柱を中心に据えながら、ここまで作り上げてきた同窓会の存在意義については、真剣に考えていかなければならない時期に来ていると思います。札幌支部では、数年前より「札幌青陵会 今と未来を語る会」という特別委員会を立ち上げ、若手会員の声を聞くなど、十年、二十年先の同窓会のあり方等についても議論を進めています。

多少、形は変わろうとも、絆を大切にしたい同窓の結び付きは、永遠に続いてほしいものです。

結びとなりますが、北海道青陵会並びに全道でご活躍の同窓の皆様、そして北海道教育大学岩見沢校の益々のご発展をご祈念し、お礼の言葉とさせていただきます。

新青陵会員の抱負



「社会人になり気づけたこと」
月形町役場
岩熊春花

気がつけば社会人になってから一年が経とうとしており、社会人になってからの、時の流れる速さに驚いています。

音楽とひたすら向き合い、オーボエの練習に明け暮れた大学時代。学食でたわいのない話をしながら昼食を食べた大学時代。あの頃はもつとゆつくり時間が流れていた気がします。

教育大学を卒業しても、教員や自分の学んできたことと全く関係のない分野で就職する人は沢山いますが、私もその一人で、月形町役場で一般事務として、去年の四月から働いています。

大学時代は自衛隊の音楽隊になることが私の夢で、練習に明け暮れていた学生時代でした。しかし結果は不採用でした。オーボエに打ち込んできたことを後悔しそうになる日もありました。その時の私は結果がなかった努力は、してもしなくても同じだと思っていました。

いまこうして、月形町で社会人として働くようになり、学生時代に音

楽と向き合った時間は決して無駄ではなかったと思う場面が多々あります。働いていると、仕事で失敗し上司に叱られることも沢山あります。学生時代と違い、仕事でミスをするとかくさんの人に迷惑を掛けてしまうこともあり、日々緊張感をもって働かなくてははいけません。しかし無事に社会人として一年間過ごすことができたのは、学生時代に培った、毎日練習に打ち込むひた向きさ。上手くいかなくても、簡単に投げ出してしまわない粘り強さ。たとえ自分の努力が評価されなくても、理解してもらえなくても、自分のためにがんばり続けることのできる心の強さ。大好きな音楽だからどんなに辛くても向き合い続けることのできたことが、自分を知らない間に成長させていたからだと、社会人として働くようになり気づくことができました。

結果がでることは素晴らしいことだと思います。人に評価していただけることも、生きがいとなるような素晴らしいことだと思います。ただものごとは結果が全てではないということに社会人になり気づくことができました。結果に向かって努力したこと、関わった人たち、自分の考えたことや発言全てが、今の自分の人となりをつくっている、そんなこ

とを音楽と向き合うことで学ぶことができました。

これからは、社会人として仕事を通して自分が後悔しない、自分に恥じない生き方をしたいと思います。そして社会人としての責任感をもち、社会に貢献できる生き方をしたいです。



「高校教員として働くこと」
北海道羅臼高等学校
大宮晃希

平成二十九年三月に北海道教育大学岩見沢校、スポーツ教育課程スポーツ教育コース健康スポーツ科学専攻を卒業し、平成二十九年四月に北海道羅臼高等学校に保健体育科教員として赴任しました。周りの先生方や生徒たち、保護者の方々、地域の方々との関わりの中から様々なことを経験し学び、充実した日々を過ごしています。

私が教員を志したのは高校二年生のときでした。理由は、担任であり部活動の顧問でもあった先生に憧れを持ったからです。様々な活動を通して物の見方や考え方を変えていただき、心身ともに成長することができました。私も生徒を人間的に成長させることのできる教員になりたいと思ったことがきっかけでした。

高校卒業後は、自分が生まれ育った北海道という地で大人へと成長し

ていく高校生の心身の成長に携わりたいという思いから、北海道教育大学岩見沢校に入学しました。

大学生活のなかでも、教育実習は私の教員への気持ちをもより確かなものにする大きなきつかけになりました。実習中には、多くの仕事に参加させていただき、とても大変な日々でした。それでもその苦勞に見合うだけの魅力のある仕事だと確信することができました。

赴任地である羅臼町は四年間慣れ親しんだ岩見沢市から約400km。同じ北海道とはいえ、札幌で生まれ育った私にとって見知らぬ地での社会人生活のスタートでした。赴任校では保健体育科教員が私1人でした。他教科の先生方に相談をしながら試行錯誤する日々が続いています。生徒にどんな力をつけたいのか、どうすれば生徒に伝わるのか。考えても考えても答えは出てきません。様々な研修に参加し、日々研鑽を積むことで少しずつ前進していると思います。

教員になってから頂いた「教員はまずは授業。授業ができていない教員の言うことは生徒には響かない。」という言葉を胸に、生徒が体育を好きになれるような授業と生徒の実生活に生きる保健の授業を目指してこれからも精進していきたいと思っています。

各学科の活動状況

「音楽文化専攻の日常活動」

音楽文化専攻代表

吉尾 夢夏

音楽文化専攻では、教職的な授業や必修の授業の他に専門的な授業を受講する事が出来ます。ソルフェージュや実技レッスン、音楽理論、オーケストラ・吹奏楽の合奏、室内楽等の本格的な音楽の勉強をすることが出来ます。

音楽文化専攻には教職の道を志す者がいる事はもちろんの事、プロの演奏家、一般就職、大学院進学や海外留学を考えている人も多い為、本格的な専攻の授業を受けられるという事はとても幸せです。札幌交響楽団の先生方のレッスンを受けられる事や、今の時代を駆け巡っている教授や准教授の先生方の下で音楽を学べるという事は、この大学の強みでもあります。

音楽文化専攻は日々授業を受けるだけではなく、自分が専攻している楽器や副科として受講している楽器などの練習も行っています。個人的な練習はもちろんのこと、各自コンクールや演奏会に向けて練習を行い日々鍛錬を積んでいます。

その他に課外での演奏活動も幅広

く行なっており、岩見沢市内や札幌近郊の公共施設や駅、病院、学校等、様々な場所で演奏をさせて頂いています。

また今年度は、吹奏楽の授業の一環として、東京藝術大学の皆さんとジョイントコンサートを開催することができました。沢山の方にご来場頂き、私達の活動を知って頂くことができました。演奏活動の場を提供して頂けるということは、本当に幸せな事です。

常に感謝の気持ちを忘れず、演奏で恩返しが出来れば、努力して行きたいと思います。

青陵会の皆様のご支援があるからこそ、音楽と真摯に向き合い、日々精進できていると思えます。

皆様の気持ちを裏切ることの無いよう、精一杯勉強に励んで行きたいと思えます。



東京藝術大学とのジョイントコンサート

「美術文化専攻の日常活動」

美術文化専攻

古田 俊太郎

私たち美術文化専攻は、二月から約一ヶ月間開催する『北海道教育大学岩見沢校 修了・卒業制作展』にむけて、出展者全員で準備をしています。この展覧会は岩見沢と札幌で開催され、美術に興味をお持ちの方や、美術系大学への進学をお考えの方など、毎年多くの方が会場に足を運んでくださいます。

学生は作品をより良いものにするために、表現や技法などを研究し、制作活動を重ねてきました。これまでの学生生活のなかで、研究室展や有志で行う展覧会を自ら企画・運営することで、展覧会の運営方法を学んできました。また、来場者の方々の声はとても勉強になりました。この修了・卒業制作展は、まさに日々学んできたことを最大限いかせることができる機会だと思っています。

岩見沢駅の駅舎内にある本校の施設『北海道教育大学岩見沢校BOX (i-BOX)』では、随時学生や教職員による展覧会が行われています。定期的に展示替えを行うことで、絵画や立体などの美術作品の他、多種多様な展示を見ることが出来ます。

また、学生の中には、市民参加型プロジェクト「岩見沢人」という巨大人形劇の企画・制作に関わってい

る者もあり、改良に改良を重ね、より良いものを作りたい、市民の方々に楽しんでもらいたいと日々努力しています。

二月に開催する修了・卒業制作展では、学んできたことを最大限いかし、地域の方々にお礼の気持ちが伝えられるよう、実りのある展覧会を出品者全員で目指していきます。



「スポーツ文化専攻の日常活動報告」

スポーツ文化専攻

森 千晶

スポーツ文化専攻はスポーツ・コーチング科学コースとアウトドアライフコースに分かれており、それぞれ勉学に励んでいます。

スポーツ・コーチング科学コースでは積極的に部活動を行い、日々練習を重ねています。

放課後の練習時間以外に朝練や講

義の合間を利用した自主練習をしている学生も多く、今年はサッカー部・女子バレーボール部・剣道部・男子バスケットボール部が全国大会に出場しました。また、部活動の他にバスケ塾・バレー塾・探険クラブ・バルシューレなど幼児から中学生を対象としたスポーツ教室の指導に関わっています。実際に教える経験は他の活動では得られない学びも多く、普段の部活動や教育実習に生かせる貴重な体験です。

アウトドアライフコースでは自然体験教育・環境教育・自然体験活動・環境社会学などを学んでいます。集中講義や不定期の授業の実習では実際に登山やキャンプをしたり川でアウトドアスポーツをしながら自然や環境について考えています。長期のキャンプでは人間的な成長を実感で



「芸術・スポーツ

ビジネス専攻の日常活動」

岩見沢校の芸術・スポーツビジネス専攻3年生の授業として、前期に行われた「地域活性化プロジェクト」(指導：宇田川耕一教授)について報告します。「農商学域連携プロジェクト」という全体コンセプトのもと、岩見沢地域の農産地や商業地を盛り

きます。普段の学校生活でも畑や釣りなど日常的に外に出て体験的な学習をしています。大学の授業での学習だけでなく、それぞれ自分の興味があるボランティア活動への参加や趣味で自然とかかわり、積極的にアウトドアライフを楽しんでいます。

このような活動を通して自然と共生する暮らしの在り方を考え、環境科学の素養を身に付け自然に対する感性を磨いています。



上げていくため、大学ができることは何かをテーマに取り組みました。札幌の文化複合施設ECCでもパネル展示として紹介されました(写真)。

このプロジェクトは企画の立案からイベントの実行までを学生が自力で進めるのが特徴です。例えば、岩見沢市栗沢町のファームレストラン「大地のテラス」と連携、『和つしよい！ほろ夏祭り』と題して、敷地内で青空の下に畳を敷き、その上で飲み物や食べ物を販売する「畳ビアガーデン」といった独創的なイベントを展開しました。

『まちなか学校祭』・『まちなか朝市』では、ミニコンサートや来場者参加型のイベントで市内の朝市を盛り上げる企画を実施しました。

いずれも、地元の方々から「教育大の存在が、より身近に感じられるようになった」などの高い評価をいただきました。とても貴重な体験が出来たように感じています。



事務局便り

理事長 砂川 昌之

平成三十年を迎え会員の皆様には、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、昨年五月二十日の総会において、佐藤前会長が退任され早瀬新会長のもと平成二十九年度の活動が推進されております。特に、今年度はここ数年課題としてあげられたことに対応できるよう事務局組織の改編を図り業務の推進を図ってきました。ホームページの改定から、広報活動や内容の見直し、会員名簿の今後の見直しなど、細部にわたり、これからの同窓会の在り方にかかわり改善を進めてきたところです。

八月十一日には、北海道教育大学青陵会研究大会を開催し、新学習指導要領の下いよいよ本格的に実施される外国語教育について同窓の北海道立教育研究所の湯沼史朗氏を招きご講話をいただいたところであります。

また、様々な業務において関係の皆様方のお力添えと各支部からの多数の参加、ご協力に心から感謝申し上げます。さらに各支部ごとの行事等に会長及び役員をお招きいただいたことにも重ねて感謝申し上げます。

さらに、新年早々の一月九日には、



役員会を開催し、今年度の会務の推進状況の確認と今後の取組、さらには、かねてから会長から指示をいただいていた「今後の同窓会の在り方を検討する会」の内容について協議したところです。この会については、今後、課題を整理することや会のメンバーの選出、スケジュールなどを具体化するなどして新年度にはお示しできるように考えております。

昨年、開設された民間・公務員部会や今後の卒業生のためにも会是「親睦と資質向上」はもとより、さらに本学卒業生としての誇りをいただけるような会にしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

北海道教育大学青陵会・教育懇談会(総会後のご案内)

日時 平成30年5月19日(土) 17:10～

会場 岩見沢ホテルサンプラザ(岩見沢市4条東1丁目 0126-23-7788)

会費 5,000円(予定)

※ 総会後の教育懇談会については、全会員を参加対象にしております。

※ 多数のご参加で、旧交を温めていただきたいと思います。

※ 後日、詳しい案内が各支部に送られますので、その際には希望者の取りまとめをお願いします。

連絡先 岩見沢市立南小学校 TEL 0126-22-2618 本部長 砂川 昌之



IWAMIZAWA
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

編集後記

◇ 会報一〇一号をお届けいたします。

本号の発刊にあたり、ご多用のところ玉稿をお送りくださった皆様に心よりお礼を申し上げます。

〈広報・情報発信担当〉

部長 松田 一直

副部長 疋田 博和

部員 一ノ瀬健太郎 沢 泰宏

江幡 佳代

北海道青陵会ホームページ

<http://www1a.biglobe.ne.jp/seiryokai/>

ホームページ内にタンブラー (<http://seiryokai.tumblr.com/>)

がありますのでそちらをご利用ください。